

現在の礎を作った戦後の社会

鹿沼市・男性

●ぜいたくは敵だ

太平洋戦争(大東亜戦争)は昭和16(一九四一)年12月8日に始まった。この頃、食糧が不足して、翌年には食糧管理法(国民の食糧の確保および国民経済の安定を図るため、政府が食糧についての管理・価格の調整・流通の規制を行うことを定めた法律。昭和17年2月施行、平成7年廃止。食管法。)が施行された。食料を国が管理するので民間で勝手に売買してはいけないということである。だから農家に行って勝手にコメを買ってくるということは食糧管理法違反、売るほうも違反だった。食糧も不足していたが、「ほしがりません、勝つまでは」とか、「ぜいたくは敵だ」という標語があつて、衣類や生活物資は制限された。

戦時国債(注1)というのが発行され、働いた給料は一定額だけ金でくれたが、あとは国債でくれた。つまり強制的に国債を買わされたことになる。金も制約されるし、食糧もないし、豊かな生活には程遠かった。

昭和19年頃、東京が空襲されるようになり、疎開が始まった。この頃は日本の主要都市のあちこちが空襲で焼かれた。夜は灯火管制があつて、警報が鳴ると電気は全部消すか、あるいは覆いをして光が漏れないようにした。白いものは敵の飛行機から目立ち、白漆喰の土蔵等は標的にされると言われた。東京からの疎開がはじまって、鹿沼の

この辺にも疎開の人がやってきた。天皇陛下も日光に疎開してきた。

防空壕を掘るのが義務付けられて、空襲にそなえていた。ドカーンときてもガラスが飛ばないようにと、窓ガラスに紙を張っておいた。爆撃があつたら家が燃えてなくなるし、翌日から飢えに苦しむことになる。せめてお金だけはとっておこうというので、貯め込んだ。

昭和20年7月、鹿沼にも空襲があつた。目の前に焼夷弾がバラバラ落ちたが、我が家は焼けずすみ、間もなく終戦になった。

●学徒動員では飛行機の部品を作った

旧制中学では1年半くらいしか勉強せず、学徒動員で戦闘機の部品作りをした。その頃、日本造機という会社が現在の福田屋百貨店と黒川を挟んだ東中学校の辺りの2か所にあり、消防車と兵器を作っていた。東側は自動車の機装工場(ぎそうこうじょう)・エンジンと車体だけの車にガソリンのタンクを作ったり、周りの装備品を充実させて完成させ、軍に納めていた。福田屋の所は兵器工場で、機関銃とか大砲の弾も作っていた。

鹿沼の空襲で黒川東側の工場は全焼した。自動車のガソリンがあつたからものすごく燃えた。西の工場は無事だったが、機械を疎開させる必要から、毎日、旋盤の機械などを木炭車に乗せて板荷の山林の中に疎開させた。雨ざらしになるのを防ぐため、杉丸太を切つて下遠部の橋を担いで渡り、山の現場まで運んで、掘つ建て小屋を作つたが、そこで終戦になった。昭和20年8月15日、板

荷の農家の前で終戦のラジオ放送を聞いた。

●戦争が終わっても続く苦しい生活

戦争に負けてGHQ(連合国軍最高司令官総司令部。日本での占領政策を実施した連合国軍)が入ってきた。最高司令官のマッカーサーは日本の経済を立て直すために、米国デトロイト銀行頭取のジョセフ・ドッジを日本に連れてきて、金融引き締め対策をした。「日本国はさんざん物資を使って戦争をやつたのだから、今度は日本人も少し苦しんだ方がいいだろう」と、ドッジラインという金融引き締め政策を行い、日本の国民にさらに耐乏生活を強いた。そうでなくても厳しい暮らしだということに：

ある日突然、勅令によって「新円切り替え」と「預金封鎖」が行われた。「預金封鎖」というのは、いくら貯金があろうと、とにかくその預金は払い戻しできません、と没収された。預金はなくても現金を持っている人は、「新円切り替え」で、持っている現金は使えません、ということになった。

新しい新円に替えます、といっても、替えられる量は一戸当たり決まっていって限度があつた。突然で新しい札を印刷している時間がないので、臨時の処置として印紙の小さいのを、持つていった札に張つてくれ、それが新円として認められた。印紙を張つてないものは旧円だから使えないことになる。戦後まもなく昭和23年ごろだったか、郵便局に紙幣を持っていき、ペタペタと印紙を貼つてもらった思い出がある。「預金封鎖」と「新円切り替え」を突然、同時に行った。

つまり、こういう状況だから、金持ちはいなく

なつてしまい、全部一律に貧乏になった。それがドッジの政策で、結果的には、日本のインフレ経済はいくぶん安定した。

購買意欲に比べて物の量が少なければ、たちまちインフレになる。戦争でものごく物を使って、消費財がなくなり、物がないう状況だったから、そのためにあれも買いたい、これも食べたい、と国民がみんなそういう事だったから、インフレになり、コメの値段で比較すると、百倍にもなった。それでインフレ対策をした。だから、戦前の貯蓄や国債は紙屑になった。

●タケノコ生活

日本国民はだいたい1人が1000円、平均5000円(現在の24700円ぐらいだろうか?)生活というのを強いられた。配給通帳を持っていて、米とか麦とか少し与えられる。その5000円の金の中から食糧を手に入れるわけだが、食糧は管理されているから自由には手に入らない。お金もない、そういう生活が昭和22年ころだった。着物を背負って農家に行き、食べ物と交換したりした。それは着るものを一枚ずつはぐるので、タケノコの皮を一枚ずつはぐ例えで、タケノコ生活と呼んだ。

たまたま東京地方裁判所の近くに大叔母が嫁いでいて、中央大学生だった従兄が、「今日は裁判を見に行こう」と私を連れだした。興味津々、傍聴した。裁判官、検事、弁護士がいて、被告がいる。「食糧管理法違反の裁判をこれから開始します」闇屋が裁判にかけられるわけで、殺人の裁判なん

かより食糧管理法違反の裁判がほとんどだった。

誰もが大切な、嫁に来た時の着物を箆筒から出してそれを食糧に替えた。悲痛の思いだったろう。女の人の晴れ着なんか、死ぬまで大事に取っておきたいものだと思う。それを涙をこらえて売って金にして食糧を手に入れたりした。子供が見ていても忍びなかった。

人形草が食べられると聞いて取って来たり、どんぐりの実を拾ってきてみたりしたこともあった。毎日サツマイモで米の飯なんてほとんどない。砂糖がないから甘いものなんてない。国中そんなふうだったから、その頃の写真には肋骨が浮き出たガリガリの人がいっぱい写っている。

●インフレの増大

戦後の日本経済復興は石炭を掘り、鉄を作るのが日本の基幹産業として、戦争で疲弊した日本の産業を盛り返そうというのが当時の内閣の政策だった。それをやるには金がない。どんどんインフレになってしまいうから、5000円生活の人も自分のことで精一杯。それでも日本人はささやかに貯金する国民だから、物を買わないで貯金するようにと政府は国民に訴えた。インフレのさなかに貯金しろという。まったく逆の話だ。そんなこと言っても、もう財閥は解体されてしまったし、お金を持つてる人はいない。そこに一萬田尚登という日本銀行総裁が就任し、この人が、預金してください、といって全国を歩き、宇都宮にも来た。日銀総裁が来たのなら、いくらか預金するか、というので国民は預金し、国はその金で鉄鋼、石炭を

生産をした。傾斜生産という。

●闇屋の暗躍

ところで、全国どこでも闇屋というものはあった。とにかく東京には米が足りないから、食管法をくぐり抜けて地方から米を持っていけば高く売れる。鹿沼でも今宮神社の通り、大谷産婦人科の通りとか、闇屋が並んでいた。一般の何倍もの値段だった。喉から手が出るほどほしいが、そんなものを買ったら、すぐお金がなくなってしまう。

東武線に乗ると、楡木、縦山あたりに来るとヤミ米60キくらいを背負った闇屋のおばさんたちが乗り込んでくる。その米を東京で高く売ろうという闇屋がかなりいた。他人の足元でもかまわず、空いた座席の下に押し込んだ。一斉取り締まりなどやっていると、仲間が下り電車から合図する。すると、次の駅で降りてしまう。しかし警察はそんなこともわかってるから、乗っているところを捕まえに来る。一斉取り締まりがあると60キの米を背負ってはそうそう逃げられず、食糧管理法違反で摘発されることになる。なかには米をプラットホームにばらまいてしまう人もいた。

大道で物を売ってるのは闇屋。お店は特殊ルートがないから品物が入ってこない。お店に物がなから、闇屋から買うしかない。闇屋には朝鮮人も多かった。日本は朝鮮人を連れてきて強制労働をさせていた。しかし日本が戦争に負けて、そういう連中が今度は戦勝国になった。それでそういう連中に闇屋が多かったようだ。

● 中小企業の扱い

その頃「中小企業というのはみんな闇屋だ」というのが官僚の考え方で、正規のルートでないところから買ってきて大道で利益をたくさんとってぼろもうけしている。中小企業というのはだいたいの闇屋みたいなことをやってるんだらう、という考えのようだった。そんなところへはお金を回す必要はないからというので、銀行に行つて借りるなんてとんでもない話。預金することはOKだが、中小企業にお金なんか貸しませんよ、という世界だった。

やがて日本はだんだんと立ち直つていく。そこで一九四八年頃初めて中小企業庁というのが通産省の中にできた。ずいぶん時間が経つた。これが出てきてやっと中小企業にも目が向きはじめたことになる。

どこの国でも同じパターンを取る。インフレになると、弱いものを切り捨ててしまう。日本でもある程度、基幹産業が熟成してきてから、中小企業に順番がやつと巡つてきて育成がはじまった。頑張つた中小企業には国の方でもいろんな施作を取つた。

● 朝鮮特需で息を吹き返す

朝鮮戦争（一九五〇年6月25日～一九五三年7月27日休戦。一九四八年に成立したばかりの朝鮮民族の分断国家である大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の間で、朝鮮半島の主権を巡る紛争）は終戦から5年後に始まった。

日本が負けて撤退した後、北朝鮮が韓国をこの

機に取つてしまおうとした。それを見たアメリカはあそこが共産国になつたら困るというので、マツカーサーを送り込み、マツカーサーが仁川（インチョン）に上陸して南北から朝鮮を攻める。行つたり来たり。それで朝鮮の国内は戦場にされる。物資や、武器や、食糧がいる、それをみんな日本から調達した。それで朝鮮特需というものが生まれ、日本の産業はあれでみんな息を吹き返した。特需でアメリカの金が入つたからだ。国境は結局話し合いで38度線というのができた。

アメリカというのは第一次世界大戦、第二次世界大戦、無傷で、それでドルが強くなった。それでドルの基軸通貨ができた。

日本はどんどん上向きになり、戦前の経済状況を超えた。一九五六年（昭和31年）7月に発表された経済白書の副題は、太平洋戦争後の日本の復興が終了したことを指して「もはや『戦後』ではない」とつけられた。日本は立ち直り、やがて48年になると、今度はモノ余りになった。そのときに第一次オイルショックがあり、トイレットペーパーが手に入らなくなるといふデマによって、国民はみんなトイレットペーパーを買いあさつたといふことがあつた。

太平洋戦争は生死をかけた4年間であつたが、戦後は生存をかけた戦いだつた。その戦いが十数年続いたのだつた。

（二〇一六年7月、お話を伺つてまとめました）

注1 戦時国債

太平洋戦争に使われたお金は当時の金額で1,900億円、現在の金額にすると400兆円を投入した計算になり、戦争資金のほとんどは国債の発行で調達されたという。写真上は昭和18年に発行された10円、下は昭和17年の20円の国債で、「大東亜戦争割引国庫債券」と書かれている。

資料提供：栃木市S氏

